

NHK学園生涯学習フェスティバル

# 短歌大会講演録

◆松本大会／平成12年2月5日 松本市中央公民館

◆近畿大会／平成12年3月25日 大津市生涯学習センター

◆秋田大会／平成12年5月6日 秋田市文化会館

## ◆松本大会◆

### 「体験と創作」

講演／岡井 隆

松本は、僕は何度か来たことがあるんです。お城も登りました。今度、記念の太鼓門が復元されるという、大変おめでたいことだと思えます。

今日の演題は「体験と創作」です。何か体験したことがあってそれをもとにして歌を作る、詩を作るということですけれど、「城」ということで、まず体験と創作を考えってみました。私は最近、二、三年かかりまして大勢の友人たちと「現代短歌辞典」を作りました。それは歌詞を材料にして組み

立てた辞典なんです。そのなかには、「城」という言葉も当然入っています。我々は、歌を作る時に歌詞のおかげをこうむって歌を作るわけですが、特に意識するわけではない。意識するのはどういう時かと言いますと、今回のような題詠の場合です。

「城」という題が出てくるわけですから「城」という言葉を入れなきゃいけない。次に、今まで、城という言葉を使ってるいいお手本はないかなと、そういうことを考えます。辞書を引きまして「城」というところを引

くとか、あるいは今言いました、歌語辞典の類を見て「城」という言葉を引いて、城に関する歌をたくさん見るという手もありますが、おもしろいことに、私どもの頭の中には、それなりに短歌用のといいますか、知識といえますか、そういう架空の辞典でありますが、広げられているわけです。

### 体験の美化

誰でもよく思い出す城の歌は、石川啄木の歌であります。

不來方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心

これは大抵の本に必ず載っています。僕も「お城だと啄木があつたな」と思います。正確には覚えてないから「一握の砂」を見てみようかということをしていただきます。

「不來方」は、来ない方、と書くのですが、これは盛岡のお城だということです。彼は盛岡出身で、盛岡中学校の頃に、隣にあるお城の草に寝ころんで十五の心を吸い込まれてしまったという歌ですが、誰でも知っています。それと同時に誰でも若い頃がありますから、「そうだ、自分もああいう感じがし

た」と思い出すのでしょうか。その時にできた歌の中に、

教室の窓より遁<sup>に</sup>げてただ一人かの城<sup>しろ</sup>址<sup>あかし</sup>に寝<sup>ね</sup>に行<sup>い</sup>きしかな

という歌があつて、いかに授業に熱心でなかつたか。事実、啄木は盛岡中学を中退しているのです。また、ストライキに加わつたり、いわゆる反逆児であります。ただ、これはその時に作つた歌ではありません。二十五歳の時に「すばる」という雑誌に載つた歌です。そうすると十五から二十五まで十年間、間があるのですね。「すばる」に発表した歌を作つた時は東京にいま



した。故郷からうんと離れた東京で貧苦に喘<sup>あせ</sup>ぎ、それでいて文学的野心だけは燃え上がつてるといふ時に作つた歌です。一つはこういうことが考えられます。教室の窓から逃げて城跡に行つた体験を、十年後に振り返つて見ている。体験から十年も経つてゐる。ちよつと経ちすぎではないか。

我々も幼年時代を回顧して歌を作ることがありますが、どういふことが行われるかという、一つは美化であります。十五の時はさぞかし嫌であつたであろう故郷とか、憎らしくあつたであろう中学校の教師とか、あの時は嫌だなどいふふうに思つた様々なことが抜け落ちてまいりまして、体験の美化といふことが行われます。その時は、空に向かつて自分の心が吸われていふことばかりではなかつたのですけれどその点だけが取り出される。

啄木は伝記作家によりますと、中学二年ぐらいまではとても良い成績だったので。ところが、文学にかぶれてから急に成績が落ち、反抗的になつていふたと言われています。そうであれば学校に対する態度だつて、先生に対する態度だつて必ずしも単純

なものではなかつたと思います。詩といふのはいつでもある部分をキュッと強調して、いろいろな部分が取捨選択をされていくといふことですね。だから、体験から創作といふことでは、一つは、体験の中のある部分を取り出すといふことが行われます。

### 体験とフィクション

一つ、付け加えます。美化といふのはある部分だけ残すのではなくて、現実にはなかつたことも出て来たりします。この間、東京で、俵万智さんと一緒に歌合わせをいたしました。「雪」といふ題で歌を作り合いました。俵さんも一首お出しになつて、私が弁護をする役割になつたのです。雪吊りの吊りといふのをツリーといふふうに思い間違えていた幼い頃のことを思い出して、その幼い頃の自分と一緒に今、金沢の兼六園を歩いていますよといふ歌なのです。

私が弁護しなきゃいけませんから俵さんに「あなたは福井出身だから兼六園においてになつた子どもの頃の回想を織り交せて、今兼六園を歩いているのと、昔、雪吊りの吊りといふのを、ツリーといふ英語と間違え

ていたという幼年時代の体験を一緒にして詠われたんですね」と言いましたら、「えー、困りました」「これは嘘だ」と言うんだね。「自分は大阪で生まれて育って、それから福井へ行ったんで、幼年時代の兼六園はありません。これは創作です」と。みんな大笑いをしたのですけれども、幼年時代にも自分がここへ来たならそういうことをやったかもしれないという思いつきが加わって、これは明らかに、フィクションであるということになります。

私たちは様々なデフォルメをやったり、なかったものを付け加えたりして体験を詩化したします。これは、いけないと言われていました。体験じゃなきゃいけない。いささかも嘘、偽りがあつてはならないという短歌の作り方が非常に長く広がっていました。私はそういうエコールの中で育ち、歌を作ってきました。途中で様々の歌の作り方をしましたけれど、未だにあの歌の作り方はよかつたという気持ちがあります。どういう点でよいかというと、自分の材料の範囲をわざと限定するのですね。大抵、私どもの体験というのは平凡です。ほんや

りしてきますと肝心のところを見逃したりします。それでもその最小限のところでは勝負をしてみるのの一つの詩の作り方としては、おもしろいのではないかと思つています。

とは言いますが、今では自分自身の体験してないこと、あるいは、体験よりちよつとはみ出ているものも入れてもいいという形になつてまいりました。いずれにしても、過去のことを振り返つて歌にするわけですから、ある種の美化、ある種の詩化が行われる。その詩化、美化のための手段は、たくさん持つていれば持つてるほど良い歌ができるという感じがします。

### 「城」というもの

「城」ということでちよつと考えてみたのですが、お城は近代短歌に関する限りは全部城跡です。城主も城に住んでいた武士たちもおりません。がらんどのお城です。「廢墟の美」と言つてもいいです。近世において政治の上で大きな役割を果たした、非常に優れた大きな建物であります。今は建物として使われていない。明治維新の時

に、各地のお城は壊されました。だから、天守閣もなくなつてゐるようなお城がいっぱいあります。つまり壊された跡の城跡であります。

「お城」という題を出しますと、いろいろな作品が出てまいります。観光に訪れた人にも、その町の人にも、それは生活の中で機能を失つてゐる場所であり、昔を思い出すすがある。封建制という政治組織を支えていた豪壮な建物が廢墟と化している。それを支えていた社会制度とか、人間たちというのは跡形もない。ないことの、中心になつてゐる。

先ほど言いました、私の頭の中に広げられてゐる詩歌集で「城」を考えた場合、どんなものが出て来るか、最初に思い浮かぶのは、与謝蕪村の、

絶頂の城たのもしき若葉かな

という俳句です。「絶頂」というのは、漢詩でよく使う言葉で、蕪村は漢詩的な表現を取り入れたことで有名です。絶頂の城が頼もしいということと、その城の周りが、若葉で囲まれているということは何も関係がないのであります。蕪村の俳句は、城が生

きていた時代であります。もちろん蕪村は江戸の安定した時代の人で、戦闘のための根城という意味での城ではありません。でも、藩主は生きていましたし、城は、自分の国の政治の象徴という形であったので「たのもしき」だったのですね。

もう一つ、僕の頭の中で浮かぶのが、城を出し落花一片いまもとぶ

という山口誓子さんの俳句です。これは調べますと、伊勢にある松坂という、本居宣長の住んだ、有名な商売の町、ここのお城



だろうと言われていのです。あそこは、石垣が残ったり、上の方に櫓が数本残っていたと思いますけれどもそこに桜の木があります。桜の木から離れた落花が、「今も飛ぶ」というところに感動があるのですね。ずうっと風に乗って、空を流れて行っている。山口誓子は「カメラアイ」と言われたぐらい、ものを見てそれを正確に捉えるということをやった人なのです。この城は、廃墟です。でも、城と言われた時、我々は、石垣があつて桜が咲いて、武士たちが宴をしたかもしれないとか、そういったことを思い出します。

今度の題詠では、現代に、城というのはなんだろうと比喩的に作られた歌がありました。比喩的な歌でよく出て来るのは「我が庫裡」、「我がキッチン」、これは女の城ということ。男の方ですと、「我が部屋」が自分の城です。これは何でしょうか。さっき言いましたように、城を拠点として、自分たちの生活や国を維持したように、比喩的な意味で自分のキッチンや自分の部屋があるということです。

次は、お城の庭園へ遊びに行った時の歌

です。今年は岡山の後楽園も三百年だそうですね。今から七十何年前ですが、中村憲吉が三十代の終わり頃、この後楽園へ行つて歌を作りました。お城は出てまいりませんが、いかにも広々とした庭園を表している。ちやうど今頃の歌です。「梅林の鶴」という歌を作りました。有名な歌が三首あります。

枝がちて蓄ながらの梅の園しら鶴を  
清く居らしめにけり

枝がちて、というのは、枝が多いことをいうのです。「ながら」は、のままに、です。梅林ですが、枝が多くて、蓄も目立たない。まだ花が咲いてない状態です。二月の感じかなと思います。「清く」というのは清らかに。梅の園が鶴を清らかに存在させた。歌というのは、特殊な言葉遣いをいたします。「枝がちに」、私は嫌いな言葉ではありません。「枝がちて蓄ながらの梅の園」といいますと、白い鶴が実に清らかな感じ。梅の花だらけになって、枝が目立たなくなっても、鶴のたたずまいは変わらないでしょうが、憲吉にとっては、白い鶴と黒い梅の枝が対称となつて、白い鶴が清らかだと思つたのでしょうね。



春さむき梅の疎林をゆく鶴のたかく

あゆみて枝をくぐらず

「疎林」というのは、びっしりと梅の木が植わっているのではなくてポツポツとあるのです。いかにも丈高く、首を伸ばし、気高さと丈の高さを合わせているのだと思うのです。梅の木を分けながら歩いては行くが、下をくぐっていくようなことはしないという歌です。

こういう歌になりますと、意匠が、やや目立つという点でいやだという方もいらっしやるかもしれませんね。これは鶴は容易に枝をくぐったりなんかしないんだよ、プライド高いんだよというところへ自分の美意識を投影してゐるわけでしょう。そういう意匠が目立つかなと思いますが、「春さむき」から「枝をくぐらず」まで、きちっとした歌と思います。

梅林の外にて鶴は羽ばたけり芝生

につくる影のおほきさ

梅林の外に出て鶴が羽ばたいた時に、枯芝の上に影が落ちた。その影がいかにも大きく見えたということだ。

これは直接「城」ではありませんが、城

です。城に広々と展開されていた園に、鶴が放し飼いになっている。この背景には近世の城が、城跡だということがあります。

啄木が学校をさぼって行ったのと同じ城跡なのです。そういう意味では虚しい場所なのですが、その場所に行つて、放し飼いの鶴とか、梅の林の状態を楽しみながら歩いてるわけですね。それを、憲吉はきちっと捉えている。

「春寒き梅の疎林をゆく鶴のたかくあゆみて枝をくぐらず」という歌の中に、近世武人の丈高い姿勢や、「芝生につくる影のおほきさ」の鶴の中に、今は失われた何かを予感しているように思います。後樂園の向こうにお城があるという感じがします。

### 鳥の歌・体験と創作

実は、私は鳥の歌が好きで、いろんな鳥の歌を読みます。鳥そのものが好きで、おもしろいなと思うのです。今から三年ぐらいい前ですが、白鳥の歌を作ろうと思つて何ヶ月かあちこちへまいました。一度は青森県の六ヶ所村の方、あの辺に沼がいくつかありますが、白鳥を見て歌を作りまし

た。それから、新潟県の瓢湖へまいました。寒い一月、白鳥が帰る前なのですけれど、歌を作りました。

これは私の好きな歌なのですが、斎藤茂吉が昭和八年、残っている雁を見に行つて作つた歌があります。

春の雲かたよりゆきし晝つかたとは  
き眞菰に雁しづまりぬ

春の雲が空をただよつていった。ちょうど昼の頃であった。マコモの生えているところに、雁の一群が静まっている。大方の鳥は、朝と夕に食事をします。沼の近辺や田んぼを飛びますが、昼間は、大抵は岸边にいて静かであります。夕方になると飛び立つて雁特有の渡りの声を聞かしてくれるのです。こういう歌を、私はかなり意識いたします。

それで、私が瓢湖へまいました時に作りました、こういう歌はいかがでしょうか。

白鳥は沼のあなたになりながら啼き  
つつ寒の光に沈む

白鳥は沼の向こうに、啼きながら、寒の光の中に沈んでいった。白鳥は啼きながらずうっと沈んでゆく、その感じを捉えたの

であります。

ちよつと中村憲吉プラス斎藤茂吉から影響を受けている。白鳥が、茂吉とは違うけれど、なんか遠くから眺めているところがある。

で、また、こういう歌も作りました。

ひろげたるつばさのうらの大いなる

さびしさ水に着かむとぞして

白鳥ですから、水に着こうとしてパーッと羽を広げるんですね。広げた「つばさのうらの大いなるさびしさ」、これは「芝生につくる影のおほきさ」ではないかという感じがしてまいります。でも、憲吉の場合は芝生の上で影を作る、その大きさでありますが、私の場合はパーッと広げた時の羽の裏が寂しい。飛んでる時はあんなに綺麗な形で飛びますけれども、水に落ちる時はぶざまですよ、大きいから。重心を後ろにかけて降りるのでありますが、その時の感じを「大いなるさびしさ」といつてみました。

これは私の体験と創作の結論なのかもしれませんが、様々な場面を捉える時に、スケッチしますね。手帳を持って行って。啄木は十年経って体験の美化を致しましたが、

私の場合は瓢湖に行ってからそんなに間なく歌を作るわけでありませぬ。それでも作りたくない場面がある。膨大なパイプから餌を流し込むというような形で餌付けをやっています。こういうことのために、白鳥は増えていて。これは本当は人間模様ではないか。美化して「つばさのうらの大いなるさびしさ」とか言っているけれど、そうではなくて、人間が関わっていった動物環境の変化だろうという感じがしますね。でも、短歌の場合は、ある種の美化が行われる。

それでいいのではないのでしょうか。私たちは、日本へ来て、餌付けをされて、平成でなければ営めないような鳥対人間の関係をしっかりと見て、写し取る。その時に感じた悲しみとか寂しさとかは、動物対人間の関係の中から生まれてきているものかもしれない。現代的な風景ですよ。現実にはなかったであろうようなものも付け加わっています。

私の場合も、本を読みながら近づいていったというような歌があったり、豌豆の煮えたのを食べている時に白鳥が水に降りてきたという歌があります。豌豆はそばの

レストランで煮えてましたから確かなのですけども、食べたかどうかは、ちよつと危ない。本も、電車の中で読んで行ったということでしょう。

その中で表したいと思ったのは、餌付けをされている現代的な白鳥と日本人との関わりの中にある（あるいはお城が持つようなものかもしれないけど）一種の虚しさを含めた現代風景ですね。非常に古い言葉を使いながら、自分としては現代の短歌を作りたいと思っていたのです。

もう一つは、啄木とか、茂吉とか、憲吉とか、そういう人たちのいろいろな作品、先例を材料にしまして、その材料の中から自分なりの模写をします。そういったことをやることによって前の人よりもちよつと違ったものを作っていく。体験という言葉の中には自分が実際に体験したということもありますが、本を読むという形や、歌を理解するという形の体験もあります。それも体験と創作の一つの形ではないかなというふうに思います。（拍手）